

私のメンター



函館市医師会

としま ひろし
戸嶋 浩

メンターとは、「良き指導者」「優れた助言者」などを意味し、仕事やキャリアの手本となり指導や助言をしてくれる人材を指します。メンターには、社会人としてのあり方や仕事に対する考え方など、幅広い視点から相手の成長を支援する役割が期待されています。またメンターと交流して「成長の支援(メンタリング)」を受ける人をメンティーと呼びます。

まず初めに私の天職である整形外科のメンターについてお話します。人が一生の道を決めるとき、意外と思わぬ時に思わぬ出会いのようなことで決まってしまうことがあります。

昭和38年に北大を出て函館協会病院でのインターンのとき、偶然回っていったところ、松野誠夫先生(北大名誉教授ですが、当時は助教授でした)が手術されているところで、夢中で鉤引きをお手伝いさせてもらいました。この手術が終わったあとで、先生から「整形外科に入らないか?」とお誘いを受けこの道に入ってしまったわけです。

その後、昭和53年11月6日に函館の地で医院を開院しました。開院式の時、松野先生がわざわざおいでくださって、あすから一人の医師として独立するのだという緊張感が張り詰めていた私に、2つの教訓を示してくださいました。一つは「個人の限界を知り、決して無理をするな!」。もう一つは「なるべく学会などに出席して、その時の趨勢を知るようにしなさい!」と。私はこの教訓を座右の銘として、40数年間の開業を無事に全うできたのも松野先生の示された教訓に添うものだと思っています。

松野先生は年老いても覇気を持っていつまでも自分の夢を追い続け、杜甫のいう「老驥千里を思う」を全うした先生の生涯に感銘を受けました。

次は私の趣味のメンターの話をしてしましよう。山内裕雄先生は順天堂大学の名誉教授でありましたが縁あってYYN通信のメル友に加えていただきました。今は亡き博学な先生からは同じ趣味の特に造詣の深いクラシック音楽についていろいろお教えいただいたのが懐かしい。「歎異抄をひらく」は無人島に、一冊持っていくなら「歎異抄」のキャッチコピーで売っていますが、私は先生が勧める、中野雄「指揮者の役割」(新潮選書、2011)を持っていきたい。著者は山内先生と同じ年の音楽プロデューサー・評論家でウィーンフィル、ベルリンフィル、アムステルダム・コンセルトヘボウのヨーロッパ三大オーケストラのことが実に面白く書かれています。指揮者

に絶対必要な資質として、強烈な集団統率力、継続的な学習能力、巧みな経営能力、天職と人生に対する執念を挙げています。指揮者をメンターに置き換えればまさにピタリではないでしょうか。ぜひともこれから指導的立場に立つ若い先生方に読んでいただきたい一冊でもあります。

